

仏説観普賢菩薩行法經

－後半－

(416 頁 10 行～420 頁 5 行)

爾の時に世尊、而も偈を説いて言わく、
若し眼根の悪あつて 業障の眼不浄ならば
但當に大乘を誦し 第一義を思念すべし
是れを眼を懺悔して 諸の不善業を尽くすと名づく
耳根は乱声を聞いて 和合の義を壊乱す
是れに由つて狂心を起すこと 猶お癡なる猿猴(えんこう)の如し
但當に大乘を誦し 法の空無相を觀ずべし
永く一切の惡を尽して 天耳をもつて十方を聞かん
鼻根は諸香に著して 染に随つて諸の觸を起す
此の如き狂惑の鼻 染に随つて諸塵を生ず
若し大乘經を誦し 法の如實際を觀ぜば
永く諸の惡業を離れて 後世に復生ぜじ
舌根は五種の 惡口の不善業を起す
若し自ら調順せんと欲せば 勤めて慈悲を修し
法の真寂の義を思うて 諸の分別の想なかるべし
(416 頁 10 行～417 頁 7 行)

その時に、釈尊は、更に詩をもつて次の様に説かれました。

もしも、視覚機能が、過去からの不浄な行いの積み重ねによって損なわれてしまつて、眞實を見ることができなくなっている時は、ただひたすらに、大乘經を唱え、その究極の教えに心を集中すべきです。それが、眼の惡癖を修正改善して、これまでの様々な過ちの積み重ねを解消していく方法なのです。

聴覚機能は不愉快な声を耳に聞かせて、調和のとれた心の状態を掻き乱します。そのような乱れた心は貴方を狂つた猿のような状態にするのです。ただひたすらに大乘經を唱えて、すべては自分の意味付け次第であり、どのような意味づけをするのも自由であることに気づくべきです。そうすれば、永遠にあらゆる惡意や敵意は消え去り、あらゆる声を、ありのままに聞くことができるようになるのです。

嗅覚機能は様々な香りに執着させ、それらに触れたいという欲望を駆り立てます。このような狂つた鼻は、その執着心に従つて、様々な煩惱を生じさせるのです。もしも、大乘經を唱え、ものごとのありのままの姿を觀ずることができれば、永遠に諸々の悪い影響をもたらす行いから離れることができ、それらは後の生で再び生じることはないでしょう。

舌の機能は、嘘をついたり、人の惡口を言つたり、二枚舌を使つたり、美辭麗句ならべたり、

誹謗中傷するなどの悪い結果をもたらす行いを積み重ねます。

もしも、自分の行いを制御したいと欲するのなら、慈悲の心を育むように努力し、本当の静寂につつまれた悟りの境地に思いを馳せて、自他の分別に囚われることが無いようにしなさい。

心根は猿猴の如くにして 暫くも停まる時あることなし

若し折伏せんと欲せば 当に勤めて大乘を誦し

仏の大覚身、力無畏の所成を念じたてまつるべし

身は為れ機関の主 塵の風に随って転ずるが如し

六賊中に遊戲して 自在にして罣礙なし

若し此の悪を滅して 永く諸の塵勞を離れ

常に涅槃の域に処し 安樂にして心懽喜ならんと欲せば

当に大乘經を誦して 諸の菩薩の母を念ずべし

無量の勝方便は 実相を思うに従って得

此の如き等の六法を 名づけて六情根とす

一切の業障海は 皆妄想より生ず

若し懺悔せんと欲せば 端坐して実相を思え

衆罪は霜露の如し 慧日(えにち)能く消除す

是の故に至心に 六情根を懺悔すべし

(417 頁 8 行～418 頁 4 行)

こころの機能は、猿のようであり、ひと時たりとも留まる時がありません。

若しも、それを統御しようと欲するならば、懸命に大乘經を読誦し、仏が成就した完全なる悟りと、能力と畏れの無さに思いを馳せなさい。

身体は、様々な機能の拠り所であり、塵が風によって吹き荒れるように、六人のならず者達が、その中で好き勝手に暴れ回って留まるところを知りません。若しこれらの悪党どもを、制止して、その圧倒されるような欲望の数々から離れて、常に寂滅の境地に留まり、いつも清らからで静かな気持ちでいたいのであれば、大乘經典を心に唱え、菩薩を生み出す中道の境地(菩薩の母)に思いを馳せなさい。相手に応じてそれぞれを悟りへと導く数限りない巧みさは、ものごとの本当のあり方が分かることで得られるのです。これらの六つの方法は、六つの感覚機能を統御する方法と言われます。過去からの誤った行いの積み重ねによる荒波のような弊害の数々は、全て、ものごとの本当のあり方を知らないことによって生じる妄想によって引き起こされるのです。もし、それらの誤った行いの数々を反省し、改めようと思うのであれば、姿勢を正して坐り、ものごとの本当のあり方に思いを馳せなさい。そうすれば、数々の誤ったものの見方や衝動は、朝露が太陽の光で消えゆくように、無くなっていくでしょう。だからこそ、心を込めて、六つの感覚機能の過ちを反省し改めていくべきなのです。

是の偈を説き已って、仏、阿難に告げたまわく、
汝今是の六根を懺悔し普賢菩薩を觀ずる法を持って、普く十方の諸天、世人の為に広く分別して説け。仏の滅度の後、仏の諸の弟子若し方等經典を受持し読誦し解説することあらば、応に静処の若しは塚間(ちょけん)、若しは樹下、阿練若処(あれんにやしよ)に於いて、方等を読誦し大乘の義を思うべし。念力強きが故に我が身及び多宝仏塔、十方分身の無量の諸仏、普賢菩薩、文殊師利菩薩、藥王菩薩、藥上菩薩を見たてまつることを得ん。法を恭敬するが故に諸の妙華を持って空中に住立して、行持法の者を讃歎し恭敬せん。但大乘方等經を誦するが故に、諸仏、菩薩昼夜に是の持法の者を供養したまわん。(418 頁 5 行～419 頁 1 行)

これらの詩を説き終わられて後に、仏は阿難に次のように告げられました。
貴方は今こそ、この六つの感覚機能の誤りを反省し改めながら普賢菩薩に思いを馳せる方法を、しっかりと自分のものとして、あらゆる世界の天人たちや人々の為に、相手応じて広く説きなさい。仏がこの世を去った後に、仏の弟子達が、もし、この全てのものが等しく悟りへと至ることできる經典(方等經典)を受け入れ、保ち、読誦して、人に説くことがあるのならば、必ずや、静かな場所や、若しくは墓や、若しくは樹下や森林のような修行に適する所に於いて、方等經を読誦して、大乘の意味に思いを馳せなさい。彼らの集中力はとても強いので私のこの身や多宝仏塔や十方(東西南北上下)の方角にいる無数の分身である沢山の仏、普賢菩薩、文殊師利菩薩、藥王菩薩、藥上菩薩を見ることができるよう。彼らは、法を、心から尊崇しているので、素晴らしい花々を手にもって空中に留まり立って、法を受け入れ、保持して行じる者を算段して、心から敬うでしょう。ひたすらに、全てのものが等しく悟りへと至ることできる大乘の經典を読誦するからこそ、多くの仏や菩薩は、昼も夜も、この法を保持して行じる者を応援してくれるのです。

仏、阿難に告げたまわく、
我賢劫の諸の菩薩及び十方の仏と、大乘真実の義を思うに因るが故に、百万億阿僧祇劫の生死の罪を除却しき。此の勝妙の懺悔の法に因るが故に、今十方に於いて各仏となることを得たり。若し疾く阿耨多羅三藐三菩提を成ぜんと欲せん者、若し現身に十方の仏及び普賢菩薩を見んと欲せば、当に淨く澡浴して淨潔(じょうけつ)の衣を著(き)、衆の名香を焼き空閑の処に在るべし。応当に大乘經典を誦読し大乘の義を思うべし。(419 頁 2 行～419 頁 7 行)

仏は、阿難にお告げになりました。
大乘の本当の意味に思いを馳せることによって、私は、今の劫期(賢劫)の多くの菩薩や十方の仏と同様に、百万億阿僧祇劫(計り知れない程の長い間)の生死の繰り返しに於いて重ねてきた過ちや思い違いを積み重ねを取り除くことができたのです。この素晴らしく勝れた懺悔(過去からの過ちを反省し改めて行く修行)の方法によって、今、十方に居られる方々も仏となることができたのです。若し、すぐにでも阿耨多羅三藐三菩提(仏が到達できる他者とも共有できる最高の悟り)を成就したいと思う者や、今の身のままで、十方の仏と普賢菩薩を見たいと思う者は、淨く体を洗い清め、清潔な衣を着、いい香りのする香をたいた静

かな所に在って、ただひたすらに、大乘經典を読誦して、大乘の意味に思いを馳せるべきなのです。

仏、阿難に告げたまわく、

若し衆生あって普賢菩薩を觀ぜんと欲せん者は、当に是の觀を作すべし。是の觀を作す者は是れを正觀と名づく。若し他觀する者は是れを邪觀と名づく。仏の滅度の後、仏の諸の弟子、仏の語に随順して懺悔を行ぜん者は、当に知るべし、是の人は普賢の行を行ずるなり、普賢の行を行ぜん者は惡相及び惡業報を見じ。其れ衆生あって、昼夜六時に十方の仏を礼したてまつり、大乘經を誦し、第一義甚深の空法を思わば、一彈指の頃に百万億阿僧祇劫の生死の罪を除却せん。此の行を行ずる者は真に是れ仏子なり、諸仏より生ず。十方の諸仏及び諸の菩薩、其の和上(わじょう)となりたまわん。是れを菩薩戒を具足せる者と名づく。羯磨(かつま)を須いずして自然に成就し、応に一切人天の供養を受くべし。(419 頁 7 行~420 頁 5 行)

仏は、阿難にお告げになりました。若し、生きとし生ける者の中で、普賢菩薩を觀たいと思う者は、このような精神集中をなすべきなのです。このような精神集中をなすものこそ、正しい精神集中をしていると言えるのです。それ以外の精神集中をなす者は、正しくない精神集中をしていると言えるのです。仏がこの世を去られたのちに、仏の弟子達が仏の御言葉に素直に従って、懺悔(過去からの過ちを反省し改めて行く修行)を実行する者は、彼らこそが普賢の行を実行している事を知るべきなのです。普賢の行を実行する者は、悪い(悟りの妨げとなる)状況に直面することも、過去からの悪い(悟りの妨げとなる)行いの積み重ねの影響に晒されることも無いでしょう。若し、生きとし生ける者の中に、昼夜6回、十方の仏に礼拝し、大乘經を読誦して、その最も深淵なる眞実である空法(全てのものは縁起によって生起しており、いかなるものにも固定的な意味や実体は無い故に、すべては自分の意味付け次第であり、どのような意味づけをするのも自由であるという事実)に気づくことができれば、指を弾く瞬間に、百万億阿僧祇劫(数えきれない程の長い期間)の生と死の繰り返しの中で重ねてきた過ちの積み重ねを解消することができるでしょう。このような行を実行できる者こそが、本当の意味での仏の子であり、多くの仏達によって生み出された者なのです。十方の仏達と菩薩達がその指導者となるでしょう。彼らは菩薩戒を成就した(菩薩としての行動規範を守り実行することができる者となった)と言えるのです。戒律を授ける儀式を須いることなく、自然に成就し、必ず全ての人々や天人から供養を受けることになるでしょう。